

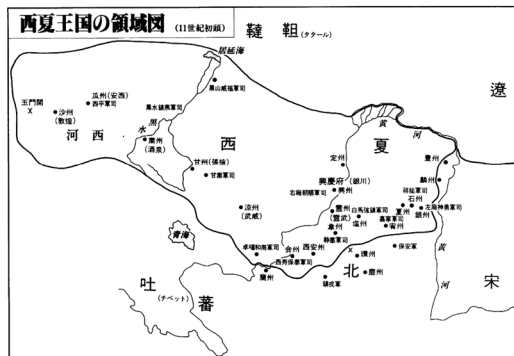
西夏語の名詞句構造について

荒川 慎太郎

0. 西夏語の概要¹

0.1. 西夏語の概要

西夏語²は1038～1227年、中国西北部に存在した西夏国の言語であり、1036年に創製されたといわれる西夏文字資料によってのみ知られる。西夏が滅んだ後も西夏語・西夏文字は使用されていたが、現時点では1502年以降の西夏文字資料は見つかっておらず、その後死語・死文字と化したと考えられている。西夏語はチベット＝ビルマ語派に属し、ギャロン語や四川省西部のいわゆる川西走廊言語との関係も指摘されている。確認される限り、同語派の言語としては地域的に最北限といえる。



左：西夏の領域 右：西夏語と川西走廊言語との位置関係
(図は共に西田 1989a: 15 より)

西夏語は死語であるため、全て文字資料が分析の対象となる。西夏文字資料は、仏典、漢語古典の翻訳、韻書、詩歌、法律集、各種契約文書、題記など多岐に及ぶ。現存する資料のうち9割以上を占めるのが仏典である。本報告では、筆者の

¹ 本節は荒川 (2010a, 2013) 冒頭の「西夏語の概要」の縮約修正版である。

² 簡便な概説は、西田 (1989b, 2012), Gong (2003) などを参照。

有するデータの都合により仏典から多くの例を引くことになる。

西夏文字は1文字がおよそ1語ないし1形態素であり、声調を持つ1音節を表す。全ての例文で西夏文字を示す。

0.2. 西夏語の音韻

西夏語の1音節は、CV(C)/T (T= Tone) の構造を持ち、西夏文字1文字で表される。西夏語の諸韻書は漢語音韻学に倣い、CV(C)/TをC-「声母」と-V(C)/T「韻母」に分けて記述する。声母を「反切上字」、韻母を「反切下字」に分析する。声調、声母、韻母の順に述べる。

まず、西夏語の声調は「平声」と「上声」と漢訳できる、2種類の声調が基本にあったことが確認されている。西夏時代の韻書『文海』では全ての西夏語音節が平声、上声ごとに大分類される。

西夏語韻書は、主に調音部位に基づき、声母を9種類に分類する。それらは、漢語訳すると「重唇音類・軽唇音類・舌頭音類・舌上音類・牙音類・歯頭音類・正歯音類・喉音類・流風音類」のように名称付けられる。西夏語音韻学ではこの分類と順序が厳密に守られる。

一方、西夏語韻母は平声「97韻」・上声「86韻」と細分化され、通し番号が付与されていた。声調の対立を除き韻母の形式が同じ韻類、すなわち「通韻」は「105韻」に分類される。韻母番号と代表字が『文海』冒頭に記載されることから、こうした番号による整理が西夏語音韻学では通用していたことがうかがえる。漢語音韻学同様、「合口韻」（渡り音 -w- を持つ音節）は各韻類に含まれる。したがって、西夏語音節から初頭子音を除いた残りの部分は、105種類よりもさらに多種であったということになる。

0.3. 本稿における表記

本稿における西夏語推定音は荒川（2014）による。声調は上付き小文字で示す（1は平声、2は上声）。声母・韻母表記の一覧は稿末に付す。『夏漢字典』（李編著1997他）の項目については適宜「李3916」のようにコード番号も示す。語レベル以上の例文は通し番号・西夏文・推定音・グロス・訳注を基本とする。名詞・名詞句主要部、または派生接辞など、強調すべき要素には適宜下線を付した。（ ）内に出典文献と登場箇所も示す。この表記はおおむね出典の通りとする。

1. 西夏語名詞句の語順

1.0. 西夏語の語順と句構造

西夏語の基本語順は、SOV「主語・目的語・動詞」、Dem-N-Adj「指示詞・名詞・

形容詞」である。ただし「1, 2 人称代名詞, 複数人称」が主語・目的語となる場合, 人称代名詞独立形ではなく動詞に付加される人称接辞で表されることがある。この場合は一見 SVO, OVS のようにも見える。

名詞は状況に応じて格標識 (CM) をとる。動詞は, 接頭辞 (Pref) (否定・疑問的・完了態などを表わす), 動詞に後置する助動詞 (AV) (継続などの意味を持つ), 接尾辞 (Suf) (主に人称を表す) などが付加される場合がある。

1.1. 名詞句の語順

西夏語では 1 語あるいは 1 形態素が 1 音節である。しかし音形式から名詞・形容詞・動詞などの品詞を決定することはできないため, 従来は厳密な定義づけなく, 慣用的に「名詞・形容詞・動詞」などのカテゴリーが文法の説明に使用されてきた。例えば荒川 (2014: 130) で示したように, 「形容詞」というカテゴリーが必要かどうかは引き続き検討の余地がある。本稿では一般名詞など具体的な対象のあるもの, 抽象名詞, 動詞からの派生名詞, 代名詞, 数詞などを「名詞」として扱う。

名詞 (句) は, 形容詞が後置されるのを基本とする。ここで「基本」と断ったのは, 仏教語彙, 漢語借用語など, 「聖なる」「大きな」のような要素が名詞に前置される場合も多数あるためである。例は後述するが, これらは複合名詞的に扱うのが適当かもしれない。本来は, 𐽀𐽁𐽂²lhe? ²lenq 国+大きな=大国 (金剛 06-5+1) のように, 他のチベット=ビルマ語派同様, N-Adj が基本語順であったと考えられる。なお, 指示代名詞 (Dem)・疑問代名詞 (Q), 数詞 (Num) は名詞に前置される。

名詞修飾節 (AC) は名詞に先行する。関係節を示す要素は特に無い。所有関係は「所有者・属格標識 (Gen)・所有物」のように表される。

名詞と名詞の関係, 名詞と動詞の関係を表す「格」は, 名詞に後置する格標識によって表される場合があるが, 明らかに格関係にありながら標識を欠く場合も多いため, 義務的な要素とは言えない。

以上の状況をスロット式に表記すると以下ようになる。もちろんこれらの全ての要素が表出するような例文は確認できないため, 一部推測によるものであることを断っておく。

AC	N.Gen	Dem	Num	N	Adj	CM
----	-------	-----	-----	---	-----	----

1.2. 本稿の構成

まず 2. で名詞を, 一般名詞, 動詞+派生接辞による名詞, 代名詞, 数詞の順で説明し, 次に 3. で名詞の修飾構造を, 形容詞の説明, 修飾節による表現, 所有表現の順に述べる。

2. 各種の名詞

2.1. 名詞類

2.1.1. 一般名詞

初めに音形式から、名詞を概観する。名詞は1音節から複数の音節に及ぶものがある。西夏語では、仏教語彙以外で3音節以上の語彙³は一般的ではなかったと考えられる。

1 音節語の例

𐰽𐰺 ²lyuq 身 (金剛 42-3)
𐰽𐰺 ¹tsyer 法 (金剛 64-5)

2 音節語の例

𐰽𐰺 ²jyan ¹chyu 衆生 (金剛 05-2)
𐰽𐰺 ²ldwIr ²ryeqr 經典⁴ (金剛 00-1)

3 音節以上の語の例

𐰽𐰺 ¹a? ¹lo ¹han 阿羅漢 (金剛 24-4)
𐰽𐰺 ¹a? ²nu' ¹ton ¹lo ¹san ²meu: ¹san ¹po ¹tyen 阿耨多羅三藐三菩提 (金剛 64-2)

2.1.2. 複合名詞

2音節語と異なり、別々の語(名詞同士でない場合もある)が結合して生じるのが複合名詞⁵である。次の例のように、漢語と語順の異なる場合もある。

𐰽𐰺 ²bi: ²be: 低い+高い=高低, 高さ (金剛 64-1)

形容詞が名詞に前置される漢語的な語順の語彙で、ほぼ複合名詞として定着したものもある。

𐰽𐰺 ⁶tha ¹ti:q 大いなる+願う=大願 (金剛 05-4)

³『番漢合時掌中珠』には𐰽𐰺 ²rar ²ki: ¹kyu 「吃兜芽(野菜の一。カブ?)」(李 1994: 405) など3音節語語彙があるが非常に少数である。党項族人名では3音節3文字も一般的だが、ここでは言及しない。

⁴仏典の「~経」はこの二語で訳される。

⁵Gong (2003: 614-615) では、「名詞+名詞」ばかりでなく「名詞+形容詞+名詞」など様々な複合語が紹介されている。ただし本節では全ては扱わない。

⁶𐰽𐰺 は西夏語でも数少ない「異音同字」で、韻書の別々の場所に存在し、異なる推定音を持つ。李 4456 ¹tha, 李 4457 ²lenq。意味は共に「大きい」。前者は漢語の借用、後者は本来の西夏語の語彙であろう。

仏教語彙も、名詞同士ではない結合で成立したものもあるようである。

𐰽𐰺𐰍²se: ¹dyu 識 + 有る = 有情 (西田 1989b: 412r)

複数は名詞 (句) の後に「～など」を示す𐰽²nI:などを後置して表す。

𐰽𐰺𐰍¹dyIr ²gwi: ²do ²nI: 四句頌等 (金剛 34-1)

2.2. 派生接辞による動詞の名詞 (化)

a) 行為者名詞「～する者」𐰽²myeqr', b) 事象化名詞「～する (べき) こと」𐰽²ldeu, c) 道具化名詞「～する物 (道具)」𐰽²si: など⁷がある。

a) V + 𐰽²myeqr'

𐰽𐰺𐰍¹ri:r ²myeqr' (阿耨多羅三藐三菩提を) 得る者 (金剛 50-5)

b) V + 𐰽²ldeu

𐰽𐰺𐰍²dze: ²dze: ²ldeu ¹me: 教化するべき (こと) はない (金剛 66-1)

この要素 𐰽²ldeu は「～するべき」という義務をあらわす助動詞でもあるが、文脈によっては「～する (べき) こと」という解釈が適当のため、時に事象化名詞形成用の接辞とみなす。

c) V + 𐰽²si:⁸

(01) 𐰽𐰺𐰍¹a? ²nu' ¹ton ¹lo ¹san ²meu: ¹san ¹po ¹tyen ¹ri:r ²si: ¹tsyer ¹a? ²ri:r
 阿耨多羅三藐三菩提 得る こと 法 QP 得る
 阿耨多羅三藐三菩提を得る (そのことの) 法を得るであろうか
 (金剛 50-2, 3)

⁷ 西田 (1989b: 412r) では「行為者名詞」と「道具名詞」と称されて説明される。V + 𐰽²ldeu の形式を筆者は「事象化名詞」と呼び、この項目に加える。𐰽²ldeu と 𐰽²si: に関しては近年、聶 (2013) でも議論されている。聶によれば、前者は「動作されるもの」、後者は「動作するもの」のような使い分けが認められるという。

⁸ 李 3916 でも基本的には文法用語とされているが、『金剛經』科文では本動詞的な用法も確認できる。

𐰽𐰺𐰍²si: ²ldeu ²zi: ¹me: ¹po ¹tyen ²ngwu
 具える べき 皆 寂 菩提 である
 具えるべき (こと) は皆寂菩提である (金剛科 176)

2.3. 代名詞

2.3.1. 人称代名詞

人称は1, 2人称を基本とし, 3人称には後述の遠称代名詞が用いられる。1人称代名詞には𑖇𑖄²nga, 2人称代名詞には𑖇𑖄²ni: が一般的である。本稿で資料とした文献で登場しない形式⁹も含め, Gong (2003: 607) では次のような体系が想定されている。

人称	単数一般	単数敬称	複数	複数 (包括 / 除外)
1	𑖇𑖄 ² nga	𑖇𑖄 ² mo:	𑖇𑖄𑖇𑖄 ² nga ² ni:	𑖇𑖄𑖇𑖄 ² ga ² mi: (包括) 𑖇𑖄𑖇𑖄 ² gl: ² mi: (除外)
2	𑖇𑖄 ² na:	𑖇𑖄 ² ni:	𑖇𑖄𑖇𑖄 ² ni: ² ni:	_____

いわゆる再帰代名詞「自ら」として, 𑖇𑖄¹e: が用いられる。

(02) 𑖇𑖄 𑖇𑖄 𑖇𑖄 𑖇𑖄

𑖇𑖄¹e: 𑖇𑖄¹tse: ²pho: ²Kar

自ら 他 分別する

自らと他を分別する (金剛頌 093-3)

2.3.2. 指示代名詞

西夏語の指示代名詞には, 1) 一般的な近称・遠称の代名詞の他に, 2) 動詞句の一部として現れる特殊な指示代名詞が存在する。この二つに大別して略説する。

西夏語は近称, 遠称の指示代名詞を持つ。まず近称の指示代名詞 (以下, 近称代名詞) としては一般に𑖇𑖄²thI: 「これ」が使用される。

𑖇𑖄𑖇𑖄𑖇𑖄²thI: ¹kyiq ²jya: ²ldwIr この『金剛經』 (金剛 06-1)

遠称の指示代名詞 (以下, 遠称代名詞) は, 先行研究において3種が指摘されているものの, その使い分けについては判然としなかった。筆者の統計で, 文献中, 登場頻度の高い順に, A: 𑖇𑖄²tha: B: 𑖇𑖄²tha: C: 𑖇𑖄²tha: とすると, AとBは同一音節で声調が異なり, BとCは同一音節で声調も同じである。

荒川 (2010c) では遠称代名詞がどのような環境で現れるかを調査し A, B に関しては, 遠称代名詞に後続する要素に次のような傾向を認めた (「」は格標識などの意味 (荒川 2010a: 157-158 にもとづく))。

⁹ 李 3207 には, 皇帝の自尊「朕」として𑖇𑖄²be: が挙げられるが, ここでは一人称代名詞には含めない。

A 窺¹tha: : 名詞, 「〜と」, 「〜に随い」, 「〜により」, 「〜を以て」, 「〜よりも」

B 窺²tha: : 「〜の, 〜を」, 「〜の上」, 「〜の間」, 「〜の所」, 「〜の中」

いくつか例文を示す。□は遠称代名詞, 下線 は後続する要素である。

A 窺¹tha: と後続要素の用例

名詞 (名詞句)

(03) 窺 隣 設 窺 罍 罍 罍 罍 罍 罍
¹sha: ²wi ²tha ²wi ²u ²o ¹ti:q ¹kyuq [tha:] ²wi ²u
 舎衛 大城 CM 入る 食べ物 求める Dem 城 CM (金剛 07-4)
 舎衛大城に入って食べ物を求め, [その]城内にて… (金剛 07-4)

(04) 窺 窺 罍 罍 窺 窺 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍
²cha: ¹wi ¹zi:q ²li: ²cha: ²je: ¹zi:q ¹menq ¹nyl ¹e: ²le: [tha:] ¹nyl ²rer ¹e: ²do ¹tshweu
 徳 生む童子 徳 有する童女 二 CM 見る Dem 二 足 CM 礼拝する
 徳を生む童子, 徳を有する童女二人を見て, [その]二つの足を礼拝し… (華嚴 77, 001-6)

例文 (04) は指示代名詞と数詞, 名詞の語順を考える上でも貴重な例文と言える。

窺¹byu 「〜に随い」

(05) 窺 窺 窺 窺 [tha:] 窺 窺 窺 窺
²to ²ne: ²lu ¹jyIr [tha:] ¹byu ¹ni: ¹phI:
 悉く 王 座 捨てる Dem CM 家 捨てる
 悉く王座を捨て [それに]随って (=そして) 家を捨てる (=出家する)。
 (法華 1, 036-1~2)

B 窺²tha: と後続要素の用例

窺¹e: 「〜の, 〜を (〜に)」 (窺¹e: は出現環境により, 属格 (Gen), 对格 (Acc), 与格など複数の機能を持つ)

(06) 窺 窺 窺 窺 [tha:] 窺 窺 窺
²no ²ryeqr ¹ny'e: ¹ku [tha:] ¹e: ²cha: ¹o"
 安樂 住する 即ち Dem Gen 功德
 安樂に住すれば即ち [その]功德 (は) (法華 5, 61-1)

- (07) 𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇
²shI: 'ka: ²mo ²ni: 'tha ²tha: 'e: 'kI: 'la
 釈迦牟尼 仏 Dem Acc Pref 記す
 釈迦牟尼仏はそれを記した (法華 5, 110-5)

𑖈 ²u 「～の中」

- (08) 𑖉 𑖊 𑖋 𑖌 𑖍 𑖎 <…> 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗
²jyan²tse: 'ryur¹ryur¹wi' 'lhe? <…> 'jyu ²ne' ²kyeq 'no' ²tha: ²u ²no¹ny'e:
 菩薩 諸 諸 生 受ける 顕示する 欲する 故 Dem CM 安住し
 菩薩が所々に生を受け <中略> 顕示せんと欲する故に。その中に安住し
 … (華嚴 77, 008-2~3)

CはA, Bに比べ極めて例数が少なく、後続する要素にも一定の傾向が確認できないため、A, Bのような使い分けの差異が見出せない。一方、下線___の名詞とCに注目すると、「名詞…遠称代名詞C+照応する同一の名詞」という、前方照応的な表示例が確認できる。

- (09) 𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣
¹ryur¹tha 'tsI: ²le: 'no' ²tha: ¹ryur¹tha ²rI:r 'tshe:' ²ldwIr ²ryeqr 'tsI: 'mi:
 諸 仏 また 見る のち Dem 諸 仏 Pref 説く 經典 また 聞く
 諸仏をまた見る。のち、その諸仏の説いた經典をまた聞く。
 (法華 1, 014-2)

𑖡 ¹chI: 「それ」は、出現頻度は高くないが、「その時」などの表現の他、動詞語幹に前接化される場合がある。動詞が他の接頭辞をとる場合、「否定または完了を表わす接頭辞 - 𑖡 ¹chI: - 動詞語幹」のような語順をとる (西田 1989b: 416l-r 参照)。

𑖡 ¹chI: ²zyonq その時 (金剛 07-3) 𑖡 ¹chI: ¹zenq それ幾ばく (金剛 28-5)

比較を表す𑖡 ¹su と共起する例も確認できる。

𑖡 ¹chI: ¹su それより (金剛頌 095-1)

動詞接頭辞と動詞語幹の間に挿入される場合は、疑問文・否定文で確認できる。

- (10) 𐰇𐰏𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘𐰙𐰚𐰛𐰜𐰝𐰞𐰟𐰠𐰡𐰢𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿
 1'soq 1'tuq 2'lenq 1'tuq 1'ryur 2'kyeq 2'u 2'lhI: 2'mwi 2'ngo:r 2'ngo:r 1'a? 1'chI: 2'ryeqr 1'I:
 三 千 大 千 世 界 CM 微塵 一切 QP Dem 多い なり
 三千大千世界中の一切の微塵、(それは) 多いであろうか (金剛 32-4, 5)

2.3.3. 疑問代名詞

Gong (2003: 617) に整理された「最も一般的な」疑問詞に、西田 (1989b: 413r) に挙がる疑問詞を追加して示せば、以下ようになる。

- 人物「誰」𐰇𐰏 1'swI: 𐰇𐰏 2'swI:
 事物「何」𐰇𐰏 2'wa
 場所「どこ」𐰇𐰏 2'ryonq
 選択「どちら、どれ」𐰇𐰏 2'the:
 理由・方法「なぜ、どのように」𐰇𐰏𐰱𐰲 2'the: 2'so:
 分量「どのくらい」𐰇𐰏𐰱𐰲 2'wa 1'zenq
 種別「何種」𐰇𐰏𐰱𐰲 1'zenq 2'mI

- (11) 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲
 2'thI: 2'ldwI:r 2'ryeqr 2'wa 2'me:?
 Dem 経典 何 名付ける
 この経典は何と名付け… (金剛 31-2~3)

- (12) 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲 𐰇𐰏𐰱𐰲
 1'swI: 1'dyu 1'no" 1'swI: 1'me:
 誰 有する また 誰 ない
 誰が有して、また誰が有しないのか (金剛頌 063-3)

また「何+上に」で「どのような」を表している例も見られる。

𐰇𐰏𐰱𐰲𐰱𐰲 2'wa 2'syu 1'genq 2'qyi どのような (何+上) 利益 (金剛纂 07-3)

2.4. 数詞

数詞は漢語同様、十進法である。この内、「十」には異なる文字・音による 3 種が確認されている。最も一般的な「十」を含めて基本数詞を記せば、

- 𐰇𐰏 1'leu 「一」、𐰇𐰏 1'nyI' 「二」、𐰇𐰏 1'soq 「三」、𐰇𐰏 1'ldyI:r 「四」、𐰇𐰏 1'ngwI 「五」、
 𐰇𐰏 1'cheu: 「六」、𐰇𐰏 1'sha:q 「七」、𐰇𐰏 1'a:r 「八」、𐰇𐰏 1'gwyI' 「九」、𐰇𐰏 2'aq 「十」

- (14) 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇
 'lo: 'ri:r 'ryeqr 'll:
 福 得る 多い なり
 福を得る（こと）は多い（金剛 59-1）

『金剛經』では「大きい」が頻出するが、前述のように、名詞に前置される場合も多い。

𐰇𐰇 𐰇²tha 𐰇²wi 大城（金剛 07-4） 𐰇𐰇 𐰇²lhe? 𐰇²lenq 大国（金剛 06-5+1）

一方、「諸～」は名詞に前置される修飾要素である。

𐰇𐰇 𐰇¹ryur 𐰇¹e: 諸相（金剛 14-4）

複数の形容詞が名詞を修飾する場合など、形容詞は名詞に前置される。

𐰇𐰇𐰇𐰇 𐰇¹se: 𐰇²miq 𐰇²cyir 𐰇²wa 𐰇¹wa 細い，末の方便（金剛科 262）

仏典においてはこうした例もまれではなく、修飾構造として述べることもできよう。被修飾部を□で表す。

- (15) 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇¹𐰇¹𐰇¹
 'nIr 'kyuq 'byu 'kyiq 'ja:
 黄色い 求め 随う 金剛
 黄色い，求めに随う金剛（金剛 03-3）

- (16) 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇¹𐰇¹
 'zi: 'phyu 'phyu 'tseu 'zyIr 'dyu 'tsyer
 最 上 上 第 稀 有 法
 最上，第一の（上+第）稀有なる法（金剛 30-4）

最上級「最も」𐰇²zi: も頻出する。文の述部となる例で示せば次のようなものがある。

- (17) 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇¹𐰇¹
 'tha 'syen 'mo 'ny'i: 'lo: 'zi: 'na
 大 聖 牟尼 福 最も 深い
 大聖（釈迦）牟尼の福は最も深い（金剛纂 30-1）

仏典では2音節語「一切の～」という表現が頻出する。修飾する名詞に後置される。

禪 禪 禪 ¹tsyer ²ngo:r ²ngo:r 法一切 (金剛 52-5)

3.2. 名詞の修飾構造

次に修飾節について述べる。修飾節と名詞が格関係にあるものを「ウチの関係」、ないものを「ソトの関係」としてそれぞれの例を挙げる。被修飾部を□で表す。

ウチの関係

- (18) 禪 禪 禪 □
²nga ²rI:r ¹tshe: ¹tsyer
 私 Pref 説く 法
 私が説いた法 (金剛 17-5)

- (19) 禪 禪 禪 禪 □
²phyu ²tseu ²kyeq ²ka ¹a? ¹lo ¹han
 上 第 欲 離れる 阿羅漢
 第一の、欲を離れた阿羅漢 (金剛 24-4)

ソトの関係

- (20) 禪 禪 禪 禪 □
¹a? ¹lo ¹han ²I: ²ldeu ¹zI:r ¹tsyer
 阿羅漢 言う AV 実法
 阿羅漢と言うべき実法 (金剛 23-6)

- (21) 禪 禪 禪 禪 □
²kha:n ²kha: ¹miq ²ngwer ²syu ¹lyuq ¹kaq
 恒河 沙 pl ような 身命
 恒河の沙(々)のような身命 (金剛 33-6)

3.3. 所有表現

最後に所有表現について述べる。前述の格標識 禪 ¹e: が名詞と名詞の間に使われると所有関係を示す。

- (22) 𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇
²nl: ²mi' ²jyan ²tse: ¹'e: ¹wi:q ¹jl:
 普賢 菩薩 Gen 眷属
 普賢菩薩の眷属 (莫 020)

- (23) 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍
¹ryur ²jyan ²tse: ¹'e: ²gwi:
 諸 菩薩 Gen 言葉
 諸菩薩の言葉 (金剛 08-5)

明らかな所有関係でありながらこの格標識を用いない例も少なくない。

- (24) 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑
²ja:n ²tse: ²ne: ¹wu:ʔ
 菩薩 慈悲
 菩薩の慈悲 (金剛纂 24-3)

4. おわりに

西夏語の名詞句構造や修飾関係は従来あまり記述されていたとはいえない。現在話者のいない言語という制約、現存する資料の内容的な制約はあるものの、今後も用例の収集と分析に努めたい。

略号

AC: 名詞修飾節, Acc: 対格, Adj: 形容詞, AV: 助動詞, CM: 格標識,
 Dem: 指示代名詞, Gem: 属格, N: 名詞, Num: 数詞, O: 目的語, pl: 複数標識,
 Pref: 動詞接頭辞, QP: 疑問接頭辞, Q: 疑問代名詞, S: 主語, Suf: 人称接辞,
 V: 動詞

出典と略称

金剛経：金剛般若波羅密多経
 金剛経頌：金剛般若波羅密多経頌
 (以上, 荒川 2014)
 華嚴 77：大方広仏華嚴経卷第七十七 (荒川 2011)
 法華：妙法蓮華経 (西田 2005) 莫：莫高窟西夏文題記 (荒川 2010b)

参考文献

- 荒川慎太郎. 2010a. 「西夏語の格標識について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』(澤田英夫編). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 153-174.
- . 2010b. 「莫高窟・榆林窟・東千仏洞西夏文題記訳注」. 『平成19～21年度科学研究費補助金研究成果報告書「西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究」』(研究代表者：荒川慎太郎). pp. 45-106.
- . 2010c. 「西夏語の遠称指示代名詞の使い分けについて」. 『日本言語学会第141回大会予稿集』(日本言語学会). pp. 218-223.
- . 2011. 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」. 『アジア・アフリカ言語文化研究』81. pp. 147-305.
- . 2013. 「西夏語の文について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象2：述語と発話行為からみた文の下位分類』(澤田英夫編). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 151-173.
- . 2014. 『西夏文金剛經の研究』. 松香堂.
- Gong Hwang-Cherng (龔煌城). 2003. “Tangut.” In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*. London and New York: Routledge. pp. 602-620.
- 李範文. 1994. 『宋代西北方音』. 北京：中国社会科学出版社.
- 李範文編著. 1997. 『夏漢字典』. 北京：中国社会科学出版社. (増補修正本2008, 簡明版2013)
- 聶鴻音. 2013. 「西夏語の名物化後綴 sj^2 と lew^2 」. 『語言研究』第33卷2期. pp. 119-121.
- 西田龍雄. 1989a. 『西夏文字の話』. 大修館書店.
- . 1989b. 「西夏語」. 亀井孝ほか(編)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』. 三省堂. pp. 408-429. {西田2012に修訂再録}
- . 2005. 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」写真版(鳩摩羅什訳対照)』. 創価学会.
- . 2012. 『西夏語研究新論』. 松香堂.

付録：本稿における西夏語音表記

1. 声調 (上付き小文字で示す)

平声 1 上声 2

(声調不明 ? 平声と思われるもの 1? 上声と思われるもの 2?)

2. 声母

重唇音類 p ph b m

軽唇音類 f v w

舌頭音類 t th d n

舌上音類 ty' ty'h dy' ny'

牙音類 k kh g ng

齒頭音類 ts tsh dz s

正齒音類 c ch j ny sh

喉音類 ' h

流風音類 l lh ld z r

(声母不明 ? 推定に何らかの根拠を持つもの 子音表記+ ?)

3. 韻母（西夏語 105 韻の分類と表記を次のようにする。）

第 1 環			第 2 環			第 3 環			
1	R. 1	1.1=2.1	u	R. 61	1.58=2.51	uq	R. 80	1.75=2.69	ur
2a	R. 2	1.2=2.2	yu	R. 62	1.59=2.52	yuq	R. 81	1.76=2.70	yur
2b	R. 3	1.3=2.3	yu						
3	R. 4	1.4=2.4	u:						
1	R. 5	1.5=2.5	u'						
2	R. 6	1.6	yu'						
3	R. 7	1.7=2.6	u:'						
1	R. 8	1.8=2.7	i				R. 82	1.77=2.71	ir
2	R. 9	1.9=2.8	yi	R. 63	1.60=2.53	yeq	R. 83	1.78	yir
3a	R. 10	1.10=2.9	i:						
3b	R. 11	1.11=2.10	i:				R. 84	1.79=2.72	i:r
1	R. 12	1.12=2.11	i'						
2	R. 13	1.13	yi'						
3	R. 14	1.14=2.12	i:'						
1	R. 15	1.15=2.13	in	R. 64	1.61=2.54	enq			
2	R. 16	1.16	yin	R. 65	1.62=2.55	yenq			
1	R. 17	1.17=2.14	a	R. 66	1.63=2.56	aq	R. 85	1.80=2.73	ar
2	R. 18	1.18=2.15	ya				R. 86	1.81	yar
3a	R. 19	1.19=2.16	a:	R. 67	1.64=2.57	a:q	R. 87	1.82=2.74	a:r
3b	R. 20	1.20=2.17	a:						
4	R. 21	1.21=2.18	ya:						
1	R. 22	1.22=2.19	a'				R. 88	1.83	ar'
2	R. 23	2.20	ya'				R. 89	2.75	yar'
3	R. 24	1.23=2.21	a:'						
1	R. 25	1.24=2.22	an						
2	R. 26	1.25=2.23	yan						
3	R. 27	1.26=2.24	a:n						
1	R. 28	1.27=2.25	I	R. 68	1.65=2.58	iq	R. 90	1.84=2.76	Ir
2	R. 29	1.28=2.26	yI	R. 69	1.66=2.59	yiq	R. 91	1.85	yIr
3a	R. 30	1.29=2.27	I:	R. 70	1.67=2.60	i:q	R. 92	1.86=2.77	I:r
3b	R. 31	1.30=2.28	I:						
1	R. 32	1.31	I'	R. 71	1.68	iq'			
2	R. 33	1.32=2.29	yI'						
3				R. 72	1.69=2.61	i:q'			

1	R. 34	1.33=2.30	e			R. 93	1.87=2.78	er	
2	R. 35	1.34=2.31	ye			R. 94	1.88=2.79	yer	
3a	R. 36	1.35=2.32	e:						
3b	R. 37	1.36=2.33	e:						
1	R. 38	1.37=2.34	e'						
2	R. 39	1.38	ye'						
3a	R. 40	1.39=2.35	e:'						
3b	R. 41	1.40	e:'						
1	R. 42	1.41=2.36	en						
2	R. 43	1.42=2.37	yen						
1	R. 44	1.43=2.38	eu						
2	R. 45	1.44=2.39	yeu						
3a	R. 46	1.45=2.40	eu:						
3b	R. 47	1.46	eu:						
1	R. 48	2.41	eu'						
2	R. 49	1.47	yeu'						
1a	R. 50	1.48	o	R. 73	1.70=2.62	oq	R. 95	1.89=2.80	or
1b	R. 51	1.49=2.42	o						
2	R. 52	1.50=2.43	yo				R. 96	1.90=2.81	yor
3	R. 53	1.51=2.44	o				R. 97	1.91=2.82	o:r
1	R. 54	1.52=2.45	o'						
2	R. 55	1.53=2.46	yo'						
1	R. 56	1.54=2.47	on	R. 74	1.71=2.63	onq			
2	R. 57	1.55=2.48	yon	R. 75	1.72=2.64	yonq			
3	R. 58	1.56=2.49	o:n						
1	R. 59	1.57	o''						
2	R. 60	2.50	yo''						
1							R. 98	2.83	wor
2							R. 99	2.84	ywor
1				R. 76	2.65	eqr			
2				R. 77	1.73=2.66	yeqr			
1				R. 78	2.67	eqr'			
2				R. 79	1.74=2.68	yeqr'			
							R.100	1.92=2.85	yIr
							R.101	1.93=2.86	yer'
				R.102	1.94	woqr			
	R.103	1.95	ya:n						
	R.104	1.96	un						
	R.105	1.97	ua						